

令和元年6月20日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04692

研究課題名(和文) 日米の小中学校・大学のパートナーシップによる美術教育の国際協働学習モデルの開発

研究課題名(英文) Development of a cross-culturally collaborative learning model for art education through a partnership of American and Japanese elementary, middle, high schools and universities

研究代表者

中村 和世 (Nakamura, Kazuyo)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：20363004

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：成果は、米国研究者2名の日本招聘による研究協議会の開催、グローバル教育に関する最新動向の文献レビューと現地調査、J・デューイの国際教育論を踏まえて、異文化理解を目的とした図画工作・美術科の学習指導に関する理論的枠組みを構築したこと、広島県と米国インディアナ州の小中高等学校14校との共同研究を通して、異文化理解を目的とした図画工作・美術科の学習開発を行い、参加者に対するインタビュー調査と質問紙調査によって、効果的な学習指導法を明らかにしたこと、広島大学附属高等学校・三原小学校、シカゴ大学実験学校の小中学校と協働型アクション・リサーチを行い、開発を行った学習指導法の効果を検証したことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内外で、グローバル化に即して学校教育を刷新していくことが課題となっており、本研究の学術的・社会的意義は、米国インディアナ大学東アジア研究所とのパートナーシップのもと、米国研究者と研究協議を行い、日米の小中高等学校の教員の協力による協働型アクション・リサーチを通して、異文化理解を目的とする図画工作・美術科のカリキュラムの国際協働モデルを開発したことである。

研究成果の概要(英文)：There are three outcomes. The first outcome is that a theoretical framework for cross-cultural art education to promote mutual understanding is developed based on two international colloquiums, critical review of literature on global education, fieldwork in schools, and J. Dewey's theory of international education. The second outcome is that instructional methods effective to mutual understanding across cultures are found through collaborative research including semi-structured interview and questionnaires with teachers in elementary, middle, and high schools in Hiroshima and Indiana, USA. The third outcome is that the degree of effectiveness of developed instructional methods are examined through collaborative action research with Hiroshima University's affiliated elementary and high schools and the University of Chicago's lower and middle schools.

研究分野：図画工作・美術科教育

キーワード：図画工作 美術 カリキュラム 異文化間教育 教育実践 学習開発 地球市民

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)「教育振興基本計画」(2013年)に示されるように、グローバル化に即して学校教育を刷新していくことや、グローバル教育を進める教師の職能開発が課題となっている。行政並びに専門研究者レベルのみでなく草の根レベルでグローバル化に対応する美術教育を進めていく必要性があり、本研究は、米国インディアナ大学東アジア研究所とのパートナーシップのもと、日米の小中高等学校教員との協働を通して、次の学習指導要領の改訂に向けて継続課題となっているカリキュラムの国際モデルを開発する。

(2)国際的に主要な動向として、ユネスコと国際美術教育学会等の協力によってリスボンで開催された第1回芸術教育世界会議(2006年)が挙げられる。21世紀に応じた芸術教育の方針として、創造性、柔軟性、適応能力、革新性などを身につけさせること、学習者が所属する地域社会との関連性から学習の適切性を配慮すること、文化的多様性の確保と促進に貢献する芸術教育を推進することなどが示され、国内外で、地域文化を助長しつつグローバル化に応じることのできる美術教育カリキュラムの具体化が求められている。

2. 研究の目的

(1)異文化間の相互理解のために、図画工作・美術科を通して子どもに育成すべき資質・能力を、文献研究、海外調査、日米の研究者や学校の教員等との国際協議を通して明確化する。

(2)米国インディアナ大学東アジア研究所とのパートナーシップのもと、日米の小中高等学校教員を主体としたウェブ会議を開いて、異文化間の相互理解を目的とした図画工作・美術科の学習を国際協働によって開発し、開発した学習指導の効果을明らかにする。

(3)広島大学附属高等学校・三原小学校、並びに、シカゴ大学実験学校の小中学校の協力のもと、上記(2)で明らかにした学習指導の効果検証をプレテスト・ポストテストを用いたアクション・リサーチを通して行う。

3. 研究の方法

(1)全米美術教育学会の元会長であるパデュー大学芸術学科教授であるR・セイボル教授、並びに、米国インディアナ大学東アジア研究所副ディレクターであるT・カング教授を日本に招聘し、学校教員等を交えた研究協議を開き、国際的動向の文献レビューや最新事例も踏まえつつ、グローバル化の時代に図画工作・美術科を通して育成すべき資質・能力の明確化を図る。

(2)研究期間3年間を通して、広島県と米国インディアナ州の小中高等学校14校の協力のもと、異文化間の相互理解を目的とした図画工作・美術科の学習開発を行い、研究協力者である教員に対するインタビュー、参加者である児童・生徒約250名を対象とした質問紙調査を実施し、異文化理解を促進するために効果的である学習指導法を明らかにする。

(3)広島大学附属高等学校・三原小学校、並びにシカゴ大学実験学校の小中高等学校の研究協力を通して、広島県と米国インディアナ州の研究協力校14校を対象とした調査から明らかになった効果的な学習指導法の検証を目的としたアクション・リサーチを実施する。アクション・リサーチでは、児童・生徒163名を対象にしたプレテスト・ポストテストを行い、異文化感受性の向上について測定を行う。

4. 研究成果

(1)2017年9月に全米美術教育学会の元会長であるパデュー大学芸術学科教授であるR・セイボル博士を招聘して、大学美術教育学会との連携のもと、美術教育研究者と学校の教員等を交えて、「これからの美術教育の在り方をグローバルに考える 日米交流を通して」をテーマに研究協議を行った。協議を通して、日米両国に共通して、文化の多様性の助長、協働を伴う学習の促進、芸術による異文化間コミュニケーションを通して子どもの感性を育む学習を展開することなどが課題となっていることが確認された。協議の中で、セイボル博士には、2014年に出された全米視覚芸術スタンダードに組み入れられている「礎石となるアセスメント・モデル」を中心に発表していただき、米国の美術教育では、「学習の転移につながる創造的思考の質的向上」を測るアセスメントの開発が進んでいることが明らかになった。具体的には、行動指標を示したパフォーマンス・スタンダードをガイドとして、創作のプロセスで生じた試行錯誤や修正など創造を生み出す思考の記録をポートフォリオに残し、自己評価と他者評価によってメタ認知させることで、主体的に自己の思考の枠組みを発展・変容させていく方法が実践されている。また、異文化芸術の学習が「創造的思考の質的向上」を図る上で必要と捉えられている。本協議の記録は、大学美術教育学会の公式ホームページ(<https://www.uaesj.com/>)で公開された。

(2)2014年よりユネスコから出された一連の地球市民教育に関する文献や教育学分野における主要な研究のレビューを踏まえ、J・デューイの国際教育論をベースに、美術を中心とした異文化間教育の理論的枠組みを明確化した。

(3)2016年から2018年の3年間を通して、広島県と米国インディアナ州の小中高等学校14校の協力のもと、異文化間の相互理解を目的とした図画工作・美術科の学習開発を行い、日米の研究協力者に対するインタビュー調査、参加者の児童・生徒約250名を対象とした質問紙調査によって、どのような学習指導が児童・生徒の異文化理解を促進するために効果的である

のかを明らかにした。調査からは、グローバルな課題を扱った共通題材を用いること、児童・生徒自身と関連のある地域文化を表現させること、異文化間コミュニケーションを深めるために児童・生徒が制作した作品を活用することなどに効果が見られることが示された。開発した学習の実践報告は米国インディアナ大学東アジア研究所の公式ホームページ (<https://easc.indiana.edu/programs/ncta-programs/hiroshima-art.html>) から公開している。

(4)広島大学附属高等学校・三原小学校、並びにシカゴ大学実験学校の小中学校の協力のもと、上記の研究成果(3)で示した学習指導法の効果検証を目的としたアクション・リサーチを実施した。アクション・リサーチでは、児童・生徒163名を対象にしたプレテスト・ポストテストを実施し、結果、異文化感受性の向上について効果が確認された。加えて、異文化美術の学習を通して、異文化の価値システムに対する感受性は、年齢に応じて、「自文化中心主義」「認識」「受容/尊重」「評価/価値づけ」「適応/統合」「二文化併存・多文化併存」の6段階を経て発達する示唆が得られた。

表1. 異文化感受性の発達段階

| | 段階 | 要素 |
|---|-------------|--|
| 1 | 自文化中心主義 | ①文化的相違が経験されていない。 |
| | | 文化的相違を認識していない。 |
| 2 | 認識 | ①異文化の視覚的表象を認識している。 |
| | | 異文化の視覚的表象に表された民族、生活、文化の存在を認識している。 |
| 3 | 受容/尊重 | ①美術における文化的相違を受容し尊重する。 |
| | | 自分自身の文化と比較したり、それに対して判断したりすることなしに、異文化をそのまま受け入れる。 |
| 4 | 評価/価値づけ | ①異文化美術の独自性のよさを評価/価値づけする。 |
| | | 異文化交流の意義を認識する。 |
| 5 | 適応/統合 | ①異文化美術の視覚的表象の特性を認識しながら、相互作用する。 |
| | | 異文化美術に見られる思考方法の特性を認識しながら、相互作用する。 |
| | | 異文化美術に表された感情の特性を認識しながら、相互作用する。 |
| | | 異文化美術に表された精神性を認識しながら、相互作用する。 |
| | | 美術の活動を通して、異文化の人々と考えや感情を共有することに価値を見出している。 |
| 6 | 二文化併存/多文化併存 | ①異文化の文化的枠組みを内面化している。 |
| | | 新しく出会った異文化に対して、それまでに習得した文化的枠組みを創造的に活用しながら、新しい枠組みを構築することができる。 |

(5)2018年6月に米国インディアナ大学東アジア研究所の副ディレクターであるT・カング教授を日本に招聘し、「美術教育による日米の学校間グローバル・ネットワークの構築」をテーマに研究協力者の教員等を交えて国際協議を行った。異文化間の相互理解を促進するために、日常の図画工作・美術科の授業から始められる学習指導のあり方を中心に意見交換を行い、今後の課題として、総合的・教科横断的なカリキュラム開発の必要性や、指導の指針となる子どもの発達段階を踏まえた資質や能力のスタンダードを明確化していく必要性が示された。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

Kazuyo Nakamura, *Art Education for Peace-John Dewey's view of intercultural experience after his visit to Japan in 1919-*, Bulletin of the Graduate School of Education, Hiroshima University Part I (Learning and Curriculum Development), 査読無, Vol.67, 2018, 73-81

〔学会発表〕(計6件)

Kazuyo Nakamura, Gina Alicea, Allison Beaulieu, Shinichi Matsuzaki, A Deweyan Progressive Approach to Designing Intercultural Art Curricula for Global Citizenship, Education Centennial Colloquium on Dewey Then and Now, Chicago, 2019年5月

中村 和世、日米交流による異文化感受性を育む図画工作科の学習開発、美術科教育学会第40回滋賀大会、2018年3月

Theresa Kang, Cheryl Maxwell, Leah Morgan, Kazuyo Nakamura, Laurette Roales, Global Explorations in Art Project: Developing a Cross-Cultural Learning Model through the Partnerships among Schools, Museums and Universities, The Art Education Association of Indiana Annual Convention, Indianapolis, USA, 2017年11月

Kazuyo Nakamura, Theresa Kang, Marjorie Cohee Manifold, Global Explorations in Art Project: Developing a Cross-Cultural Learning Model through the Partnerships among Schools, Museums and Universities, 35th World InSEA Congress 2017-Daegu, Korea, 2017年8月

Kazuyo Nakamura, Marjorie Manifold, Leah Morgan, Creating Global Connection Through Art: The Indiana and Hiroshima Art Exchange Project, NAEA National Convention: New York 2017, USA, 2017年3月

中村 和世、異文化間コンピテンシーを育成する図画工作科の学習開発 米国インディアナ大学東アジア研究所との国際協働を通して、第55回大学美術教育学会北海道大会、2016年9月

〔図書〕(計2件)

中村 和世 他、ミネルヴァ書房、やわらかな感性を育む図画工作科教育の指導と学び、2018年、163-168

中村 和世 他、三元社、美術教育ハンドブック、2018年、20-28

〔その他〕

ホームページ等

<https://easc.indiana.edu/programs/ncta-programs/hiroshima-art.html>

6 . 研究組織

(2)研究協力者

研究協力者氏名：ロバート・セイボル

ローマ字氏名：(SABOL, robert)

研究協力者氏名：テレサ・カング

ローマ字氏名：(KANG, theresa)

研究協力者氏名：ジーナ・アリセイア

ローマ字氏名：(ALICEA, gina)

研究協力者氏名：アリソン・ポーリュー

ローマ字氏名：(BEAULIEU, allison)

研究協力者氏名：シェリル・マックスウェル

ローマ字氏名：(MAXWELL, cheryl)

研究協力者氏名：ハナ・シュラー

ローマ字氏名：(SHULER, hannah)

研究協力者：カシディ・ヤング

ローマ字氏名：(YOUNG, cassidy)

研究協力者氏名：リア・モーガン

ローマ字氏名：(MORGAN, leah)

研究協力者氏名：マージョリー・マニフォルド

ローマ字氏名：(MANIFOLD, marjorie)

研究協力者氏名：ローレット・ローレル

ローマ字氏名：(ROALES, laurette)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。